

新学習指導要領における複式学級のカリキュラム・マネジメントに関する問題点の検討

清水 将・阿部 真一・立花 正男*, 菅野 亨**
板井 直之・村上 貴史・菊池 はるひ・草薙 宥映・熊谷 真倫・塚田 哲也***
(2020年2月21日受理)

Sho SHIMIZU, Shinichi ABE, Masao TACHIBANA, Toru KANNO, Naoyuki ITAI,
Takashi MURAKAMI, Haruhi KIKUCHI, Hiroe KUSANAGI, Marin KUMAGAI,
Tetsuya TSUKADA

A Study on Problem of Curriculum Management for Combined Classes in the New Course of Study

1 はじめに

わが国の人口は、平成22年の国勢調査以降減少に転じており、それともなう少子高齢化の影響によって学校統廃合が急速に進行している。学校教育法施行規則には学校の規模が定められており、小中学校では12学級が適性規模とされ、これ以下の学級数の学校は小規模校に分類されている。そのような状況がある中で、地理的条件から小規模であっても小中学校を維持する必要がある地域も決して少なくない。例えば岩手県では、藤岡(2010)によれば、小学校の8割近くが11学級以下に該当するため、地域的な慣例として6学級以下の学校が小規模校として一般的に捉えられている。しかしながら、適性規模の学校がわが国の大多数を占めるわけではなく、実際には小規模校は全国に多数存在している。令和元年度の学校基本調査では、小学校では公立19,185校(0学級247校を除く)のうち、約43%の8,284校が小規模校に該当する。さらに単学級で6学年が維持できない5学級以下の学校も、約9%の1,769校ある。これら5学級以下の児童数が少ない極小規模校といわれるような学校では、2つの学年で学級の人数が16人(小学校の1学年を含む場合と中学校に

おいては2つの学年で8人)以下の場合には、複式と呼ばれる異学年合同の授業がおこなわれることになる。学校の規模は各自治体において一定の分布ではなく、地域差があり、北海道、鹿児島県、福島県、岩手県、長崎県等には極小規模の学校が多く存在している。学級担任が原則とされる小学校では、複式学級はほぼ全国的に設置されているのに対して中学校は教科担任が原則であり、教員が専門とする教科以外を担当することを避ける配慮がなされることもあって、複式学級を設置しない自治体もある。小規模校における複式学級は決して多数ではないものの令和元年度の学校基本調査では公立校に4,492学級存在している。

近年では少人数指導に対してどちらかといえばデメリットが強調される傾向があるが、決してメリットがないわけではない。少人数であるからこそその充実した指導に加えて、複式学級が構造的に持つ異学年という異質集団での多様性のある学びの体験や間接指導下での主体的な学びは、むしろ現代に求められるダイバーシティを実践する教育方法ということもできよう。わが国の産業構造を支え、生産年齢人口を増加させるためにも都市圏の人口集中は望ましいものではなく、徒歩通学圏

* 岩手大学教育学研究科, ** 岩手大学教育学部附属小学校, *** 岩手大学教職大学院

内に学校が存在し、持続可能な社会の形成を図ることは財政の観点だけでなく、わが国の教育政策の重要な目的と考えられる。小規模であることを理由に地域の学校が減少することはコミュニティの存続という点からも避けられなければならない。わが国のいずれの地域においても一定水準の教育が受けられることを担保することは、義務教育の教員養成の主要な役割を担う教育学部の重要なミッションと考えられる。

また、教師の視点でみた場合には、複式学級の授業を設計するには、単元レベルから授業構想をおこなうことは言うまでもないが、その際には上学年と下学年の2年間で単元計画をデザインすることが求められ、それらは年間計画や6年間のカリキュラムの中で位置付けることが必要となる。つまり、複式学級を担当することは、カリキュラム・マネジメントを効率的に実践することを通して、教師の職能成長の観点からも重要な機会となることが推察される。カリキュラム・マネジメントには、教育課程企画特別部会論点整理において、「①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと、②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること、③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」の3つの側面が強調されている。複式学級のカリキュラム開発では、これらが自然と意識されることになる。

小規模校や複式学級が多く存在する地域であっても複式学級の授業形態を想定した内容が養成段階の教師教育で準備されていることは少ない。小規模校の教育実習の実施といった特色ある体験的な取り組みは各大学でいくつか実施されているが、学生が事前の教育で複式学級の授業の構造を知った上で、戦略的に周回の参加を促すといった

ことは系統的におこなわれているわけではない。地域の特性を活かした教育を知るための実習を充実させ、将来の持続可能な社会を支える人材を育てる学校を担う教員を養成するには、極小規模校の特有の授業方法を理解させることが有効であり、そのためには授業や実習の事前指導という養成段階で求められる複式指導に関する内容を明らかにすることに重要な意義があると考えられる。

授業づくりで一般的に必要とされるのは、①学習対象となる内容を実際に媒介する教材、②児童生徒をどのように学ばせるかという具体的な形態や方略の選択に関わる事前の計画、③授業中に予想される教師の意思決定とその行動選択の準備などの教材、児童生徒の学習、教師の指導に集約される。これらは学習指導案では主として展開案のところに具現化されていくこともあり、養成段階ではこれらの点に着目して教師教育がおこなわれることになる。この中でも単元の計画や指導と評価の一体化については、事前教育が難しいこともあって教育実習に委ねられる割合が大きい。さらに、体系的に内容を教えるよりも実習校における実地指導に任せて経験的に学習機会を提供するだけになっていることも否定できない。ところで複式学級を担当するにあたって問題となるのは1単位時間の授業だけでなく、弾力化が認められる教科、領域の中でどのような単元配当時間を確保できるか、また、2学年で単元を構成するという制約の中でどのような組み合わせで教科や領域をデザインするのかということを検討する難しさがある。これらのカリキュラム開発ができなければ1単位時間の授業をつくることはできない。複式学級として編成される2つの学年の内容を検討しながらひとつの教科に止まらず関連する教科内容も踏まえて順序や取り扱いを決めなければならない。当然ながら2学年だけの構想だけでなく、隣接する学年へのつながりを考えて翻っては6年間の教育課程を俯瞰し、結果として教育課程を構成していく能力も必要とされるのである。ゆえに複式指導の授業をつくるということは、カリキュラム・マネジメントを理解する教材として機能させ

ることが可能になるとも考えられる。複式授業を実践するにあたっては、通常の教科内容であるコンテンツナレッジ (CK)^{注1}やペダゴジカルコンテンツナレッジ (PCK)^{注2}だけではなく、複式特有の指導方法の困難というペダゴジカルナレッジ (PK)^{注3}の問題やカリキュラム・マネジメントの考え方が必要とされ、焦点化されることにもなる。複式学級の教育を養成段階で学ぶことは、小規模校の教育だけでなく、教員としての資質・能力を向上させる教材となりうると考えられ、戦略的に学ばせることの可能性が示唆されるのである。そこで本稿では、複式指導の教師教育によって小規模小学校における教育の質を保証するため、平成29年度告示の小学校学習指導要領に示された各教科の内容やその取り扱い、構成原理などに着目し、養成段階で複式指導をおこなうために必要な知識を抽出して整理し、小規模校における教育実習の充実を図ることを目的とする。

2 複式学級の類型

複式学級は実態に応じて多くの形態がある。複式学級がどのような理由からその形態が選択、実施されているかは呼称によって理解することができ、編成の視点と呼称が内容となりうる。複式学級の形態は、各自治体によって呼称は異なり、統一されているわけではないが、編成の視点は、①編成する学年、②内容・教科、③領域（大単元）、④単元（小単元）、⑤程度などがあって、それらを踏まえて呼称が決まることになる。①編成する学年については、低・中・高学年の2学年を基本とする「通常複式」、2/3年、4/5年の低中、中高学年をまたぐ「変則複式」、欠学年がある時に学年をまたいで低中や中高学年で編成する「飛び複式」がある。②～⑤の教科とその内容にかかわる部分では、各学年の教科、各教科の年間の配当時間、領域の配当時間、単元の配当時間、学習指導要領に示される事項の難易度（程度）や配列の順序（シーケンス）などを通して低・中・高学年に示される内容とカリキュラムの理解が図られる。特に「大単元」や「(小)単元」という単

元の考え方は、領域や単元の中でのまとまりの違いを「程度」として捉えることへとつながり、指導と評価の一体化や評価の効率化の理解を深めることにつながる。

ここでは具体的な複式指導でよく使用される用語の呼称と特徴を整理する。「AB年度方式」や「二本案」といわれる2学年同内容方式では、学級の中に異学年がいても同一の内容・教材で授業が進められることを意味する。2年間をA年度とB年度として設定しておこなうため、教師の指導は単学級と大きな違いはなくなるのが特徴である。「完全一本案」といわれる2学年同内容方式では、2年間で同じ内容を繰り返しおこなうことを意味する。この方式においても教師の指導は単学級と大きな違いはなくなるため、教師の負担も少なくなるのが特徴である。これらは、カリキュラムを工夫して教師側の負担を軽減する方式であるが、児童側からみれば負担が大きく、学習指導要領の系統性を適用できなくなる点が懸念され、十分な配慮が必要となる。

これに対して、系統性を重視して内容や到達度に違いがある前提で授業をおこなうのが「一本案」や「折衷案」といわれる学年別異内容方式である。この場合には準備される指導案には2つの異なるものを学習する計画がなされる。教科や内容となる領域、単元、もしくは程度を分けて基本的には1単位時間の中にずらして2つの学年の内容と教材を準備する。そして2つの学習集団に対してどのような順番で指導をするかを決定し、直接的に指導する場面と間接的に指導して児童に主体的に学習させる場面を設定し、教師がどのタイミングで移動する（わたる）かを計画して、その際の教師行動や指導方略、学び方を準備することになる。教師の視点から主な授業の場面を分けて考えると①児童への直接の教示（インストラクション）、②児童の学習に対する観察、評価、意思決定（モニタリング、アセスメント）、③児童への個別の対応（インタラクション）などがあるが、この方式の複式指導では、特にインタラクションの方略と指導技能が求められることになる。学び方とし

て集团的な学び、主体的な学び、異学年との学びなどの設定とそれらへの教師のかかわりの頻度と程度をあらかじめ想定するだけでなく、児童のつまづきに対する手だてや発展的な課題も準備することになる。また、この方式の指導案では、2学年の2年間の単元が示されることになるが、評価の機会を適切に設定することも求められる。したがって児童の学習よりも教師の準備や指導の負担が大きいことが特徴的であるが、担任する教師にとってはカリキュラム・マネジメントの理解を深め、児童には少人数教育における多様な学び方を経験するという複式学級による教育のよさを楽しめる方式であるとも考えられる。教師教育としての学びを活かすため、本稿では以下、「学年別異内容方式（一本案、折衷案）」による複式指導を中心に検討する。

3 教科の内容構成

ここでは各教科の内容構成や配当時間などについて検討する。平成29年度告示小学校学習指導要領に示された各教科の授業時数は図1のとおりである。週あたりの単位数の増加は、2年次に1単位、3年次に2単位、4年次に1単位であり、通常の複式であれば、各学年の総単位数の違いにより、低学年、中学年では1単位時間の単学年授業が編成され、下学年を先に放課することになる。低学年における授業週の違い（34週と35週）を除いた配当時間を検討すると、社会の中学年（70と90）と高学年（100と105）、理科の中学年（90と105）、家庭（60と55）に単位数の違いがある。これらの解消方法として、2年間の総授業数を各学

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
国語	306	315	245	245	175	175
社会			70	90	100	105
算数	136	175	175	175	175	175
理科			90	105	105	105
生活	102	105				
音楽	68	70	60	60	50	50
図画工作	68	70	60	60	50	50
家庭					60	55
体育	105	105	105	105	90	90
外国語（外国語活動）			35	35	70	70
総授業時間数	850	910	980	1015	1015	1015
週あたりの時間数	25	26	28	29	29	29

図1 小学校各教科の授業時数

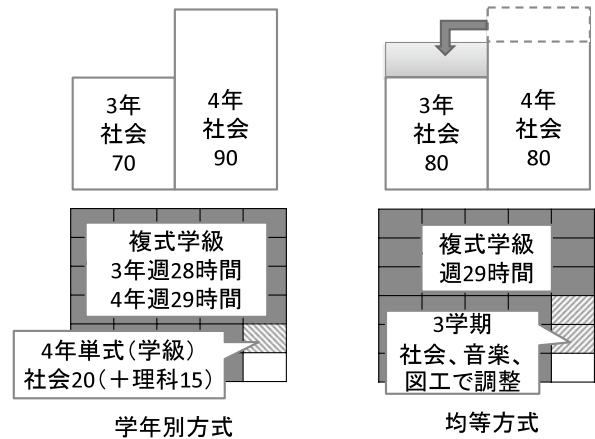


図2 中学年の複式時間割編成例(社会)

年で均等に振り分けて端数は単独の授業として確保することが考えられる。例えば中学年の社会では合計160時間を各学年80時間で実施する。ただし、年間35週とならないため、1学期12週、2学期13週、3学期10週と考えて1-2学期を週2時間計50時間、3学期を週3時間計30時間として総時数を確保することになる。もしくは社会の20時間を理科の15時間とあわせて4年生単独の時間を設定し、内容の充実を図ることも考えられる（図2）。このような単位数の違いを処理する方法として、総時数には固定時間割による放課時間の差をつける方法と先に述べた2年間の総時数を各学年に等分する方法がある。また、各学年の放課時間をそろえた時間割では、時間割を月別や週別で作成する方法や行事と関連させて連続でおこなう方法、1単位時間の弾力化をモジュールによりおこなう方法などがある。以下通常複式の内容構成を中心に教科の特性を検討しながら変則複式を解消する方策についても触れることにする。

小学校の各教科では、学習指導要領の目標や内容の示し方がそれぞれ異なる。低・中・高学年の2年間をユニットとしている教科の、複式指導では、その2年間で単元を計画することができるという「弾力化」をどう理解し、2学年で単元を分割して程度をあげていくかを検討することになる。また、各学年で内容が系統的に示されて固定される教科は、関連性や発展性を見出して、同時に取り扱う可能性を吟味することになる。全く異

学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年
時数・単位		306 9*34	315 9*35	245 7*35	245 7*35	175 5*35	175 5*35
話すこと 聞くこと	話す	話題・情報・内容	必要な事柄の収集	集めた材料の比較・分類	集めた材料の比較・分類	集めた材料の分類・関係づけ	集めた材料の分類・関係づけ
		構成・考えの形成	話す事柄の順序	話の中心が明確になる構成	話の中心が明確になる構成	事実と感想、意見を区別した構成	事実と感想、意見を区別した構成
		表現・共有	声の大きさや速さ	言葉の抑揚や強弱、間の取り方	言葉の抑揚や強弱、間の取り方	資料の活用	資料の活用
	聞く	話題・情報	必要な事柄の収集	集めた材料の比較・分類	集めた材料の比較・分類	集めた材料の分類・関係づけ	集めた材料の分類・関係づけ
		構造と内容、精査・解釈、考えの形成、共有	話の内容を捉えて	質問しながら話の中心を捉えて	質問しながら話の中心を捉えて	意図に応じ自分の考えと比較して	意図に応じ自分の考えと比較して
話し合う	話題・情報・内容	必要な事柄の収集	集めた材料の比較・分類	集めた材料の比較・分類	集めた材料の分類・関係づけ	集めた材料の分類・関係づけ	
	進め方・考えの形成・共有	話のつなぎ	司会の役割、意見の共通点や相違点	司会の役割、意見の共通点や相違点	計画的な話し合い、考えの広がり	計画的な話し合い、考えの広がり	
言語活動	話したり聞いたりする活動	紹介や説明、報告（伝えたいこと）	説明や報告（調べたこと）	説明や報告（調べたこと）	意見や提案（自分の考え）	意見や提案（自分の考え）	
	話し合う活動	質問・応答（少人数）	質問・発表、話し合い（グループ、学級）	質問・発表、話し合い（グループ、学級）	インタビュー・発表、話し合い	インタビュー・発表、話し合い	
書くこと	題材の設定・情報の収集・内容の検討		必要な事柄の収集	集めた材料の比較・分類	集めた材料の比較・分類	集めた材料の分類・関係づけ	集めた材料の分類・関係づけ
	構成の検討		事柄の順序で構成	内容の中心や段落相互の関係で構成	内容の中心や段落相互の関係で構成	筋道が通る文章全体の構成や展開	筋道が通る文章全体の構成や展開
	考えの形成・記述		語と語や文と文の続き方	考えと理由や事例との関係	考えと理由や事例との関係	事実と感想、意見の区別	事実と感想、意見の区別
	推敲		間違いの修正、語と語や文と文の続き方	間違いの修正、相手や目的に合った表現	間違いの修正、相手や目的に合った表現	文章全体の構成や書き表し方	文章全体の構成や書き表し方
	共有		感想を伝え合う	感想や意見を伝え合う（内容）	感想や意見を伝え合う（内容）	感想や意見を伝え合う（構成や展開）	感想や意見を伝え合う（構成や展開）
言語活動	説明的な文章を書く活動		報告文、観察記録文	報告文	報告文	説明文、意見文	説明文、意見文
	実用的な文章を書く活動		日記や手紙	案内やお礼	案内やお礼		
	文学的な文章を書く活動		簡単な物語	詩や物語	詩や物語	俳句や短歌、随筆	俳句や短歌、随筆
読むこと	説明的文章		構造的な把握	時間的順序、事柄の順序、内容の大体	段落相互の関係、考えと理由や事例の関係	事実と感想、意見の関係、文章全体の構成	事実と感想、意見の関係、文章全体の構成
	文学的文章		構造的な把握	場面の様子や登場人物の行動	登場人物の行動や気持ち	登場人物の相互関係や心情	登場人物の相互関係や心情
	精査・解釈		重要な語句や文	中心となる語や文、要約	中心となる語や文、要約	図表との結びつき、論の進め方	図表との結びつき、論の進め方
	精査・解釈		登場人物の行動	登場人物の気持ちの変化や性格、情景	登場人物の気持ちの変化や性格、情景	人物像や物語の全体像、表現の効果	人物像や物語の全体像、表現の効果
	考えの形成		体験とつなげて感想をもつ	感想や考えをもつ	感想や考えをもつ	自分の考えをもつ	自分の考えをもつ
共有		共有する	一人一人の違いに気づく	一人一人の違いに気づく	自分の考えを広げる	自分の考えを広げる	
言語活動	説明的な文章を読む活動		事物の仕組みを説明した文章	記録や報告などの文章	記録や報告などの文章	説明や解説などの文章	説明や解説などの文章
	文学的な文章を読む活動		読み聞かせ、物語	詩や物語	詩や物語	詩や物語、伝記	詩や物語、伝記
	本などから情報を得て活用する活動		図鑑や科学的な読み物	事典や図鑑	事典や図鑑	複数の本や新聞	複数の本や新聞

図3 国語の領域構成

なる内容を取り扱う複式指導の場合には、異学年との交流を効果的に設定することが難しくなるため、2つの学年の関連する内容を取り入れてデザインし、スパイラル構造によって学びの質を高めていくことが重要である。2学年で同時期に類似の単元を実施するためにどのような組み合わせをおこなうことができるかを検討するための基礎的な知識を以下教科毎に考察する。

3-1 国語

国語科の内容は、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」で構成され、それぞれ2年間のまとまりで示されている。「知識及び技能」の内容には、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」「(2) 情報の扱い方に関する事項」「(3) 我が国の伝統文化に関する事項」があり、「思考力、判断力、表現力等」の内容には、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の3領域に指導事項と言語活動例が示されている。「知識及び技能」では学習内容が具体的に示されてい

るが、「思考力、判断力、表現力等」では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域において身に付けるべき言語能力が示されている(図3)。つまり、国語科の内容には、「知識及び技能として身に付ける内容」と「思考力、判断力、表現力等として身に付ける言語能力」の2つがある。原則として「知識及び技能」に示す事項の指導は「思考力、判断力、表現力等」に示す事項の指導を通して行うことを基本とするが、必要に応じて特定の事項を取り上げて繰り返し指導したり、まとめて単元化して扱ったりすることも可能である。

国語科の「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の系統は、中学校を含めた12年間の体系化が図られていて、2年間のまとまりごとに示されているので、複式指導をおこなう上で同単元異内容または同内容異程度の授業を構成することが可能である。そのことによって、下学年にとっては次年度の学習内容や身に付けるべき知識、技能や言語能力を見通すことができるとともに、上

学年	1年	2年	学年	3年	4年	5年	6年
時数・単位	102 2.9*35	105 3*35	時数	70 2*35	90 2.6*35	100 2.9*35	105 3*35
身近な人々、 社会及び自然と 関わる活動に 関する内容 及び 学校、家庭及び 地域の生活に関 する内容	地域に関わる活動	地理的 環境と 人々の 生活	地域	身近な地域や市区町村の様子	県の様子		
			日本		都道府県の名称と位置	我が国の国土の様子と国民生活 生産物の種類や分布 工業の盛んな地域の分布 我が国の国土の自然環境と国民生活との関連	
			世界			世界の大陸と主な海洋、世界の主な国々	外国の人々の生活の様子
	公共物や公共施設を 利用する活動	現代 社会	経済・産業	地域に見られる生産や販売の仕事	開発、産業などの事例	自然環境に適応して生活していること 我が国の農業や水産業における食糧生産 我が国の工業生産 我が国の情報と産業との関わり	
			政治	市役所などの公共施設の場所と働き 地域の安全を守る働き	人々の健康や生活環境を支える事業 自然災害から人々を守る活動 国際交流に取り組む地域	我が国の国土の自然環境と国民生活との関連	我が国の政治の働き 我が国の国際協力
			国際関係	国際化 外国との関わり	地場産業、伝統的な文化	輸入など外国との関わり 貿易や運輸	グローバル化する世界と日本の役割
	地域に関わる活動	歴史 と 人々の 生活	地域	市の様子の移り変わり	公衆衛生の向上 過去に発生した地域の自然災害 圏内の伝統や文化、先人の働き		
			日本			生産量の変化 技術の向上 工業製品の改良 情報を生かして発展する産業	我が国の歴史上の主な事象
			世界				国際社会での重要な役割 当時の世界との関わり

図4 社会の領域構成

学年にとっては前年度に学んだ知識、技能や言語能力を再確認することができる。つまり、授業で取り扱う領域や指導事項、文種及び言語活動の内容を一致させることで、複式指導における系統性を踏まえた効果的な指導が可能になる。しかし、2学年の指導内容の違いを明確にしないまま授業を行うと、教材が異なるだけで学習内容そのものが同じになってしまうおそれがある。したがって、授業を構成する際には、2学年のまとまりで示されている知識、技能と言語能力の指導内容を具体化し、その違いを明らかにすることが重要である。

3-2 社会及び生活

社会は、「地理的環境と人々の生活」「現代社会」「歴史と人々の生活」の3領域から構成され、その領域内でも地域、日本、世界で整理されている。その目標及び内容は、各学年で示されている。複式で効果的な指導する際、身近な地域から日本、そして世界へ視野を広げていく過程は意識しておく必要がある。また、多くの目標及び内容は系統性を持っており、内容の関連性が強いものも多く見られる。その系統性を活かし、授業を構成することで、学習内容に繋がりが見え、効果的な学習になるであろう。

社会は、3学年から6学年までに学年別にはほぼ独立した内容が示されているため、基本的には学年別異内容指導となるが、上学年では対象とする範囲が少しずつ広がっていくため、それらを組み合わせることにより共通性をもたせた授業をデザインすることが可能となる。生活には、「学校、家庭や地域の生活に関する内容」に、第3学年以降の社会につながる内容がある。特に、公共物や公共施設の利用や地域に関わる活動など、「地域」との関連性が強い(図4)。

複式学級での実施において、低学年の生活では、2年間を見通した地域特性を活かした単元構成を行うことが重要である。3学年以降では教科が理科と社会になることから、2/3年生を組み合わせた変則複式の実施は困難であることに留意する。社会などの見学を異学年と合同で実施する際には、学年に応じて予習や復習と捉えて指導をおこなうか、可能であれば同じ施設に2回行くことがないように隔年で変更することを考えたい。高学年の時数差については、家庭と含めて2年間の総時数を確保することを念頭に異教科の複式授業とならないようにする配慮が求められる。

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	
A数と式	数の構成と表し方		数の表し方	整数の表し方	整数の性質		
	加法・減法			概数と四捨五入	整数、小数の記数法		
			乗法				
			除法	整数の除法			
			小数の意味と表し方	小数の仕組みとその計算	小数の乗法、除法		
			分数の意味と表し方	同分母の分数の加法、減法	分数の意味と表し方 分数の加法、減法	分数の乗法、除法	
				数量の関係を表す式		文字を用いた式	
B図形			そろばん				
			四則に関して成り立つ性質				
	図形についての理解の基礎	三角形や四角形などの図形	二等辺三角形、正三角形などの図形	平行四辺形、ひし形、台形などの平面図形	平面図形に性質	楕円や拡大図、対照な図形	
				立方体、直方体などの立体図形	立体図形の性質	概形とおよその面積	
				ものの位置の表し方		円の面積	
C測定				平面図形の面積		角柱及び円柱の体積	
				角の大きさ	立体図形の体積		
	量と測定についての理解の基礎	長さ、かさの単位と測定	長さ、重さの単位と測定	C変化と関係	伴って変わる二つの数量	伴って変わる二つの数量関係	比例
時刻の読み方	時間の単位	時刻と時間		簡単な場合についての割合	異種の二つの量	比	
Dデータの活用					割合		
	絵や図を用いた数量の表現	簡単な表やグラフ	表と棒グラフ	データの分類整理	円グラフや帯グラフ	データの考察	
数学的活動	身の周りの事象を観察したり、具体物を操作したりして数量や図形を見いだす活動	身の周りの事象を観察したり、具体物を操作したりして、数量や図形に進んで関わる活動					
	日常生活の問題を具体物などを用いて解決したり結果を確かめたりする活動	日常の事象から見いだした算数の問題を、具体物、図、数、式などを用いて解決し、結果を確かめる活動		日常の事象から見いだした算数の問題を見いだして解決し、結果を確かめたり、日常生活等に生かしたりする活動			日常の事象を教理的に扱った問題を見いだして解決し、解決過程を振り返り、結果や方法を改善したり、日常生活等に生かしたりする活動
	算数の問題を具体物などを用いて解決したり結果を確かめたりする活動	算数の学習場面から見いだした算数の問題を具体物、図、数、式などを用いて解決し、結果を確かめる活動		算数の学習場面から見いだした算数の問題を見いだして解決し、結果を確かめたり、発展的に考察したりする活動			算数の学習場面から算数の問題を見いだして解決し、解決過程を振り返り統合・発展的に考察する活動
	問題解決の過程や結果を、具体物や図などを用いて表現する活動	問題解決の過程や結果を、具体物、図、数、式などを用いて表現し伝え合う活動		問題解決の過程や結果を、図や式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動			問題解決の過程や結果を、目的に応じて図や式などを用いて数学的に表現し伝え合う活動

図5 算数の領域構成

3-3 算数

算数では、「A数と式」「B図形」「C測定（1～3学年）」「C変化と関係（4～6学年）」「Dデータの活用」の4領域が1～3学年と4～6学年で大きく分けて領域が構成され、数学的活動が示されている（図5）。各領域ではある程度系統的な学習事項の配列となっているため、上学年と下学年で同単元の授業を共通性や系統性をもたせてデザインすることも可能である。しかし、内容の系統性が強く意識されているため、異学年で同内容を学ぶことや年度によって内容を変えるAB年度方式や同内容を2年で繰り返すことは、基本的小おこなわれず、学年別に指導がおこなわれる。

系統性がある学年別でおこなわなければならないということは、決して制約だけではない。2学年で可能な限り類似内容を組み合わせ、両学年に共通する原理や数学的な考え方を取り上げていくと同時に、同じような教材を用いてそれぞれの学年に異なる指導をおこなうことになる。概念における類似点や相違点に焦点化して授業をおこなうことによって、系統性や関連性を学ばせることができ、下学年には学習の見通しをもたせ、上学年には既習事項の関連や発展を実感させることが

できる。教室の中の黒板の配置や共通教材の創出によって異学年がそれぞれのよさを活かして対話的な学びをおこなう可能性がある。

算数の場合には他教科と比較して2/3年、4/5年の変則複式は編成しやすい。また低学年では、算数の総授業時間が学年で異なるため、2学年の総時数で確保し、均等な授業時間とすることも考えられる。ただし、1年生の単位数が少ないのは学校生活に慣れるためでもあるので、最初から複式授業でおこなう必要があるかは十分に吟味が必要である。

3-4 理科及び生活

理科では、その内容を「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の4領域から構成し、それぞれの主な特徴を「量的・関係的な視点（エネルギー）」「質的・実体的な視点（粒子）」「共通性・多様性（生命）」「時間的・空間的な視点（地球）」と捉え整理している。目標及び内容は、その親和性から「エネルギー」と「粒子」、「生命」と「地球」を結び付け、「A物質・エネルギー」、「B生命・地球」の2つに分け、1学年毎に示されている（図6）。複式学級での効果的な指導を考える際、全ての領域におい

生活科			理科				
学年	1年	2年	学年	3年	4年	5年	6年
時数・単位	102 2.9*35	105 3*35	時数・単位	90 2.6*35	105 3*35	105 3*35	105 3*35
学校、家庭及び地域の生活に関わる内容	身近な自然を使った遊びに使う物づくり	エネルギー	捉え方	風とゴムの力の働き		振り子の運動	てこの規則性
			変換と保存	光と音の性質			
			資源の有効利用	磁石の性質		電流がつくる磁力	電気の利用
		粒子	存在		空気と水の性質		燃焼の仕組み
			結合				
			保存性	物と重さ		物の溶け方	水溶液の性質
			粒子のもつエネルギー		金属、水、空気と温度		
	身近な自然の観察、自然の様子や四季の変化 動物を飼ったり、植物を育てたりする活動	生命	構造と機能	身の回りの生物	人の体のつくりと運動		人の体のつくりと働き
			連続性		季節と生物	植物の発芽、成長、結実	植物の養分と水の通り道
			環境との関わり			動物の誕生	生物と環境
		地球	内部と地表面の変動		雨水の行方と地面の様子	流れる水の働きと土地の変化	土地のつくりと変化
			大気と水の循環		天気の様子	天気の変化	
地球と天体の運動			太陽と地面の様子	月と星		月と太陽	

※生活科の中から理科に関する内容のみ表記

図6 生活科(理科に関連する内容)・理科の領域構成

て、その順序性と系統性を重視する教科特性から、単元構成配列順の工夫が重要なポイントとなる。特に、地域性や季節が関係する「生命」と「地球」領域は、時期を逸することなく指導する必要がある。また、各学年の児童に確かな学びを保証するために、観察や実験、体験活動時には、単位時間内の学習の流れを「ずらし」、実感を伴った理解につなげる視点も必要となる。安全面や、一方の学年が教室外で活動する際のもう一方の学年への学習の配慮など、実際の授業場面における細やかな計画性は、不可欠であろう。

生活には、幼児期の教育との連携や接続を意識した「スタートカリキュラム」の視点が色濃く盛り込まれている。また、低学年2年間を見通した単元構成として、その目標と内容が示されており、弾力的な運用が可能となっている。内容は大きく「学校、家庭や地域の生活に関する内容」「自分自身の生活や成長を振り返る内容」の2つに分かれており、前者に、第3学年の理科や社会につながる内容が組み込まれている。特に、理科的内容に関しては、「生命」領域との関連性が強い。2年

間を見通した弾力的な運用が可能なることから、複式学級での実施を考える際は、地域特性や児童の実態に合わせた単元構成を行うことが大切である。また、理科へつながる教科ではあるものの、2/3年生を組み合わせた変則複式の実施には難しさが生じることになる。

以上、理科と生活の複式学級での実施について考えてきた。順序性や系統性が重視される理科の特性、2年間のまとまりで捉えている生活との関連、確かな学び、豊かな学びを実現する観点から、理科、生活は、通常複式の組み合わせ（当該学年の内容を学習する）による実施が好ましいことがうかがえる。さらに、実感を伴った理解や安全面への配慮を考えると、時間割を工夫し、学級単位に解体して学習することも視野に入れたい。その際には、教科同士の組み合わせをどうするかなど、さらに詳細な検討と計画が必要となる。

3-5 音楽

音楽の内容は、「A表現」(1)歌唱、(2)器楽、(3)音楽づくり、「B鑑賞」、及び〔共通事項〕

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
		68 2*34	70 2*35	60 1.7*35	60 1.7*35	50 1.4*35	50 1.4*35	
A 表現	歌唱	思, 判, 表等	曲想を感じ取って表現を工夫		曲の特徴を捉えた表現を工夫		曲の特徴にふさわしい表現を工夫	
		知識	曲想と音楽の構造の関わり, 曲想と歌詞の表す情景や気持ちの関わり		曲想と音楽の構造や歌詞の内容の関わり			
		技能(ア)	範唱を聴いて歌う 階名で模唱・暗唱		八長調の楽譜を見て歌う		八長調及びイ短調の楽譜を見て歌う	
		技能(イ)	自分の歌声及び発音に気を付けて歌う		呼吸及び発音の仕方に気を付けながら, 自然で無理のない歌い方で歌う		呼吸及び発音の仕方に気を付けて, 自然で無理のない, 響きのある歌い方で歌う	
		技能(ウ)	互いの歌声や伴奏を聴いて, 声を合わせて歌う		互いの歌声や副次的な旋律, 伴奏を聴いて, 声を合わせて歌う		各声部の歌声や全体の響き, 伴奏を聴いて, 声を合わせて歌う	
		器楽	思, 判, 表等	曲想を感じ取って表現を工夫		曲の特徴を捉えた表現を工夫		曲の特徴にふさわしい表現を工夫
	知識(ア)		曲想と音楽の構造との関わり					
	知識(イ)		楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり		楽器の音色と演奏の仕方との関わり		多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり	
	技能(ア)		範奏を聴いて演奏する リズム譜などを見たりして演奏する		八長調の楽譜を見て演奏する		八長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏する	
	技能(イ)		音色に気を付けて, 旋律楽器及び打楽器を演奏する		音色や響きに気を付けて, 旋律楽器及び打楽器を演奏する			
	技能(ウ)		互いの楽器の音や伴奏を聴いて, 音を合わせて演奏する		互いの楽器の音や副次的な旋律, 伴奏を聴いて, 音を合わせて演奏する		各声部の楽器の音や全体の響き, 伴奏を聴いて, 音を合わせて演奏する	
	音楽づくり	思, 判, 表等(ア)	音遊びを通して, 音楽づくりの発想を得る		即興的に表現することを通して, 音楽づくりの発想を得る		即興的に表現することを通して, 音楽づくりの様々な発想を得る	
		思, 判, 表等(イ)	どの様に音を音楽にしていくかについて思いをもつ		音を音楽へと構成することを通して, どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつ		音を音楽へと構成することを通して, どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつ	
		知識(ア)	声や身の回りの様々な音の特徴		いろいろな音の響きやそれらの組合せの特徴			
		知識(イ)	音やフレーズのつなげ方の特徴		音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴		音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴	
		技能(ア)	設定した条件に基づいて, 即興的に音を選んだりつなげたりして表現する		設定した条件に基づいて, 即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する			
		技能(イ)	音楽の仕組みを用いて, 簡単な音楽をつくる		音楽の仕組みを用いて, 音楽をつくる			
	B 鑑賞	知識	曲想と音楽の構造との関わり		曲想及びその変化と, 音楽の構造との関わり		曲想及びその変化と, 音楽の構造との関わり	
(共通事項)	知識	音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる身近な音符, 休符, 記号や用語について, 音楽における働きと関わらせての理解		音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符, 休符, 記号や用語について, 音楽における働きと関わらせての理解				

図7 音楽の領域構成

の各領域等において、「身に付けることができるように指導する」として、事項ア「思考力・判断力・表現力等」にかかわるもの、事項イ「知識」に関わるもの、事項ウ「技能」に関わるもの(A表現(1)～(3)のみに設定)のように、それぞれ2年間のまとまりで示されている(図7)。

音楽の学習では、表現及び鑑賞の活動を通して、「思考力、判断力、表現力等」「知識」「技能」の内容を相互に関わらせながら、一体的に育てていくことが重要である。また、どの領域や分野においても「思考力、判断力、表現力等」「知識」「技能」に関する学習の目指す方向が同一であり、学習が質的に高まっていくように示されている。

音楽の系統性は、資質・能力に対応して6年間の体系化が図られていて、2年のまとまり毎に示されているので、複式指導を行う上で同単元異内容または同内容異程度の授業を構成することが可能である。

3-6 図画工作

学校や児童の実態などに応じ、弾力的な指導を重視する観点から、低学年、中学年、高学年の2学年毎にまとめて目標・内容が示されている。目標には、低学年では「楽しく」、中学年では「豊かに」、高学年で「創造的に」発想や構想をする。内容では、「A表現」と「B鑑賞」は、本来一体である内容の二つの側面として、図画工作を大きく特徴付け、(1)「思考力、判断力、表現力等」、(2)「技能」、共通事項で構成されている(図8)。

図画工作では、2学年のまとまりが示されているものの、6学年で共通する内容も示されているので、隣接学年との複式学級編成は比較的容易であり、変則複式であっても系統性が大きく損なわれることはない。複式学級においては、「分野・領域」をそろえること(同単元学習)や、使用する材料や用具、活動場所などを合わせたい。しかし、全単元において合わせることは難しいため、

			1年	2年	3年	4年	5年	6年
			68 2*34	70 2*35	60 1.7*35	60 1.7*35	50 1.4*35	50 1.4*35
A表現	思考力, 判断力, 表現力等	ア 造形遊びをする活動	造形遊びをする活動を通して, 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に造形的な活動を思い付くことや, 感覚や気持ちを生かしながら, どのように活動するかについて考えること。					
		イ 絵や立体, 工作に表す活動	絵や立体, 工作に表す活動を通して, 感じたこと, 想像したこと, 表現したいことを見付けることや, 好きな形や色を選んだり, いろいろな形や色を考えたりしながら, どのように表すかについて考えること。					
	技能	ア 造形遊びをする活動	造形遊びをする活動を通して, 身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れるとともに, 並べたり, つないだり, 積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ, 活動を工夫してつくること。					
		イ 絵や立体, 工作に表す活動	絵や立体, 工作に表す活動を通して, 身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れるとともに, 手や体全体の感覚などを働かせ, 表現したいことを基に表し方を工夫して表すこと。					
B鑑賞	思考力, 判断力, 表現力等	ア 鑑賞する活動	身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して, 自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ, 表現したいこと, 表し方などについて, 感じ取ったり考えたりし, 自分の見方や感じ方を広げること。					
共通事項	ア 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して育成する「知識」		自分の感覚や行為を通して, 形や色などに気付くこと。					
	イ 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して育成する「思考力, 判断力, 表現力等」		形や色などを基に, 自分のイメージをもつこと					

図8 図画工作の領域構成

重点的に合同で学習をおこなう単元を設けることも考えられる。教科書は、上巻（奇数学年用）と下巻（偶数学年用）で使用することが多いため、それぞれに掲載されている題材のすり合わせと、用具の選定をおこなっていく必要がある。下学年は、用具の使い方や材料の仕組みに出会い、試しながら活動すること、上学年は用具の特徴や材料の仕組みを多様に活かして活動することができる。

3-7 家庭

児童生徒の発達を踏まえ、段階と高等学校までの内容の体系化が見えるよう、小・中学校ともに「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」の3つの枠組みに整理されている（図9）。また、家庭では、空間軸と時間軸の視点からの小・中・高等学校における学習対象の明確化

をおこなっている。空間軸の視点では、家庭、地域、社会という空間的な広がりから、時間軸の視点では、これまでの生活、現在の生活、これからの生活、生涯を見通した生活という時間的な広がりから学習対象を捉え、学校段階を踏まえて指導内容を整理している。小学校における空間軸の視点は、主に自己と家庭、時間軸の視点は、現在及びこれまでの生活である。生活の中から（問題を見だし、課題を設定し、解決方法を検討し、計画、実践、評価・改善する）という一連の学習過程を重視し、習得した「知識及び技能」を活用して「思考力、判断力、表現力等」を育成することに係る事項としている。

複式学級においては、5学年も6学年も同じ同じ領域構成であるものの、6学年ではその程度が高まるようにする。例えば、「B 衣食住の生活（5）生活を豊かにするための布を用いた製作」では、5学年は初めて針や糸を使用するので、ほつれない「フェルト」を用い、6学年は「布」を用いる。またミシンの使用では、5学年は比較的製作が簡単な布巾や雑巾などで直線縫いに慣れさせ、6学年は直線縫いを活用したナップザックやランチョンマットなどを製作する。このように、前学年での学びを補完、強化したり、教え合い、学び合いを促したりするような学習展開にすることが期待できる。

	5年	6年
	60 1.7*35	55 1.6*35
A 家族・家庭生活	(1) 自分の成長と家族・家庭生活	
	(2) 家庭生活と仕事	
	(3) 家族や地域の人々との関わり	
	(4) 家族・家庭生活についての課題と実践	
B 衣食住の生活	(1) 食事の役割	
	(2) 調理の基礎	
	(3) 栄養を考えた食事	
	(4) 衣服の着用と手入れ	
	(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作	
	(6) 快適な住まい方	
C 消費生活・環境	(1) 物や金銭の使い方と買物	
	(2) 環境に配慮した生活	

図9 家庭の領域構成

3-8 体育

体育では、低・中・高学年の2年間で内容が示

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
時数・単位	102 3*34	105 3*35	105 3*35	105 3*35	90 2.6*35	90 2.6*35
A体づくり運動	体づくりの運動遊び	体づくりの運動遊び	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動	体づくり運動
	体ほぐしの運動遊び 多様な動きをつくる運動遊び		体ほぐしの運動 多様な動きをつくる運動		体の動きを高める運動	
B器械運動	器械・器具を使った運動遊び		器械運動		器械運動	
	固定施設を使った運動遊び		マット運動			
	マットを使った運動遊び					
	鉄棒を使った運動遊び					
跳び箱を使った運動遊び		跳び箱運動				
C陸上	走・跳の運動遊び		走・跳の運動		陸上運動	
	走の運動遊び		かけっこ・リレー 小型ハードル走		短距離走・リレー ハードル走	
	跳の運動遊び		幅跳び 高跳び		走り幅跳び 走り高跳び	
D水泳	水遊び		水泳運動		水泳運動	
	水の中を移動する運動遊び		浮いて進む運動		姿勢を維持しながらの運動	
	もぐる・浮く運動遊び		もぐる・浮く運動		浮き沈みをしながらの運動	
E球技	ゲーム		ゲーム		ボール運動	
	ボールゲーム		ゴール型ゲーム		ゴール型	
	鬼遊び		ネット型ゲーム		ネット型	
			ベースボール型ゲーム		ベースボール型	
F表現	表現リズム遊び		表現運動		表現運動	
	リズム系				フォークダンス	
	フォークダンス					
G保健			保健	保健	保健	保健

図10 体育の領域構成

されており、2年間の中で弾力的な運用ができる(図10)。体育は12年間での体系化が図られており、領域は系統的に2年間ごとのまとまりで示されているので、同内容(単元)を異程度に捉えて授業を構成することができ、下学年にとって次年度の内容となる技を見通して学ぶことが可能である。つまり、使用する用具や器具を共通にした場を構成することができるので、それらを利用して学習内容を「ずらし」て、同じ教材の中でねらいを変えておこなうことも可能になる。例えば、器械運動のマット運動では、上学年と下学年で目標とする技を変えて同時に授業をおこなうことやボール運動では、上学年と下学年でねらい(役割やポジションなど)を変えて教材となるゲームをおこなうといったことが考えられる。学習の場や教材となるゲームが2学年で同じことが繰り返されているようであるが、内容は異なってされており、異学年との交流の中で主体的・対話的な学びとなる構造がつけられているのである。留意すべき点としては、体づくり運動領域は、各学年で取り扱う

ことになっていることや中学年以降に設定される保健領域は各学年に内容が設定されるため、必ず学年別異内容の指導形態になる。その他の領域では、単式学級においても弾力的な運用をおこなうカリキュラムとしてそれぞれの学年では扱わないこともできる型や系に該当する小単元もあるため、部分的には隔年で実施される内容構成になることは可能である。その際には通常の学級以上の技能差や体格差も生じるため、個に応じた指導が重要となる。

3-9 外国語

外国語については小学校中学年を外国語活動とし、高学年を外国語科としている。外国語活動及び外国語科の内容は、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」で構成され、それぞれ2年間のまとまりで示されている(図11)。「知識及び技能」の内容には、「(1)英語の特徴等に関する事項」があり、「思考力、判断力、表現力等」の内容には、「(2)情報を整理しながら考えなどを

	3年	4年	5年	6年
	35 1*35	35 1*35	70 2*35	70 2*35
聞くこと	ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。 イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする。 ウ 文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。		ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。 イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。 ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。	
読むこと			ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。 イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かる	
話すこと (やりとり)	ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようにする。 イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。 ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。		ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。 イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。 ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。	
話すこと (発表)	ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。 イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。 ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。		ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。	
書くこと			ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。 イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。	

図11 外国語活動・外国語の領域構成

形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」と「(3)言語活動及び言語の働きに関する事項」が記載されている。「知識及び技能」では学習内容が具体的に示されているが、「思考力、判断力、表現力等」では「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やりとり)」「話すこと(発表)」「書くこと」の領域において身に付けるべき言語能力、言語使用場面や言語の働きの例などが記載されている。つまり外国語活動及び外国語科の内容には、「知識及び技能として身に付ける内容」と「思考力、判断力、表現力等として身に付ける言語能力」の2つがある。原則として「知識及び技能」に示す事項の指導を基盤とし、「思考力、判断力、表現力等」の指導を行っていく形態となっている。

外国語活動及び外国語科の知識・技能及び言語能力の系統は、中学校を含めた12年間の体系化が図られており、2年間のまとめりに示されているので、複式指導を行う上で同内容異程度の授

業を構成することが可能である。しかし指導要領の変遷期であることから単元や教科書の内容などをそろえることは難しく、同じ内容の部分を異学年で扱う程度であろう。また根本的に、中学年では「読むこと」と「書くこと」の内容は原則取り扱わないとされている。そのため変則複式の場合、この2領域を高学年が扱う際に中学年は、その他の領域を扱わなければならない。

3-10 変則複式における合同学習による指導の効率化

これまでの検討からもわかるとおり、変則複式では、家庭や外国語などのような教科そのものの設定や国語や理科、社会のように単位時間数の違いが生じることによって、同教科や同単元の授業をデザインすることが困難になる。このような場合には、学級編成を柔軟に捉え、教科や領域の学習を効率的におこなうことも考えられる。1学

年、6学年が単式で、2/3年と4/5年の変則複式学級による場合には、4名の担任がいることを活用し、すべての教科を変則複式にするのではなく、教科によっては低・中・高学年の児童による合同学習として授業をおこなって効率化を図ることも考えられる。例えば、国語や算数は学級担任がおこない、理科と社会であれば3年生は学級担任が単独でおこない、2年生は1年生と合同で生活の授業をおこなって、4/5年変則複式は学級担任がおこない、6年生も単式で学級担任がおこなうことは可能である。もしくは、高学年を6年担任が合同授業で複式指導をおこない、中学年を4/5年担任が合同授業で複式指導をおこない、低学年の合同授業を1年と2/3年担任がチームティーチングでおこなうこともできる。また、保健の授業であれば養護教諭が担当できることなどを活かして職員構成を効率化して校内の指導体制の充実を図ることが有効と考えられる。

4 まとめ

教員養成段階で必要と思われる平成29年度告示の小学校学習指導要領に示された各教科の内容やその取り扱い、構成原理などに着目し、養成段階で複式指導をおこなうために必要な知識を抽出して整理した結果以下の知見が得られた。

- ①小規模小学校の複式指導では、学年別異内容・異程度方式が望ましく、このような授業をおこなうためには教員にカリキュラム・マネジメントの能力が求められる。
- ②系統性のある内容の共通性や相違点を焦点化することによって、下学年における学習の見通しや上学年における既習事項の関連、発展を際立たせることが容易になる。
- ③小学校では多くの教科が低学年、中学年、高学年のまとまりで内容を示しており、異学年の学びが活性化される類似の内容を扱った同単元の授業づくりが複式指導の基本となる。
- ④学年の違いによる教科の総授業時数差を解消するには、2年間のまとまりで授業時数を確保し、

学期によって週あたりの授業時数を調整することが考えられる。

- ⑤極小規模校では、複式学級にこだわらずに教員の指導の効率化を図るため、単式学級や合同学習を臨機応変に編成して、指導体制の充実を図ることが有効である。

複式授業を構想する基礎的な知見は得られたが、実際に複式の授業をデザインすることについては多くの課題がある。少人数による効果的な授業の在り方を含めて、教員養成段階でどのような取組ができるのかについては今後の課題として明らかにしていきたい。

注1：コンテンツナレッジ (Content Knowledge) 内容に関する知識。

注2：ペダゴジカルコンテンツナレッジ (Pedagogical Content Knowledge) 内容に関わる教え方の知識。教科や教材の教え方に関する具体的な知識であり、内容と一般的な教え方の知識に分けることができない知識。

注3：ペダゴジカルナレッジ (Pedagogical Knowledge) 教え方に関する知識。ここでは、一般的な教え方に関する知識ではなく、複式指導に関する特有の方略や知識。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 (2007) へき地・複式教育ハンドブック (一般編). https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/files/syouhukusiki_hekiti.pdf (2020.2.20閲覧)
- 藤岡秀樹 (2010) 複式学級の指導についての研究－教授方法を中心に－. 京都教育大学紀要 116, pp.153-64.
- 北海道立教育研究所・北海道教育大学 (2012) 複式学級における学習指導の在り方【改訂版】. http://www.dk.hokkaido-c.ed.jp/kenkyuu/project/h12_h20project/fukushiki_13.pdf (2020.2.20閲覧)
- 岩手大学教育学部附属小学校教育研究会 (2018)

- 研究紀要第33集（「創発の学び」を実現する教育課程の創造）,pp.162-75.
- 岩手県教育委員会（2002）複式指導資料集23集岩手の小規模・複式ハンドブック（国語・社会・算数・理科）。（岩手県立総合教育センター所蔵資料。現在未公開）
- 岩手県教育委員会（2003）複式指導資料集24集岩手の小規模・複式ハンドブック（生活・音楽・図工・家庭・体育）。https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/371/h15hand.pdf（2020.2.20閲覧）
- 岩手県教育委員会（2004）複式指導資料集25集岩手の小規模・複式ハンドブック（初めて複式学級を担任する先生へ）。https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/371/h16handbook.pdf（2020.2.20閲覧）
- 岩手県教育委員会（2008）複式指導資料集29集岩手の小規模・複式ハンドブック（複式指導のための資料集—一人一人に基礎・基本を定着させる指導の工夫改善—）。（岩手県立総合教育センター所蔵資料。現在未公開）
- 岩手県教育委員会（2015）複式指導資料集32集岩手の小規模・複式ハンドブック（6つの実践事例と10のQ&A）。https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/371/hukusiki27.pdf（2020.2.20閲覧）
- 岩手県教育委員会（2016）複式指導資料集33集岩手の小規模・複式ハンドブック（「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す～3つの実践事例と10のQ & A～）。https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/371/h28hukusiki0228.pdf（2020.2.20閲覧）
- 岩手県教育委員会（2017）複式指導資料集34集岩手の小規模・複式ハンドブック（各教科等の指導を通して資質・能力を育む～5つの実践事例と10のQ & A～）。https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/371/h29hukusiki0326.pdf（2020.2.20閲覧）
- 鹿児島県教育委員会（2018）南北600キロの教育～へき地・複式教育の手引き～。https://www.pref.kagoshima.jp/ba04/kyoiku-bunka/school/hekichi/tebiki/documents/59978_20180531221029-1.pdf（2020.2.20閲覧）
- 宮崎県教育委員会（2011）複式学級を有する学校のために—複式学級指導資料—。<http://himuka.miyazaki-c.ed.jp/kenkyoui/fukushiki-shidou-shiryoudou/index.htm>（2020.2.20閲覧）
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編。日本文教出版。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説算数編。日本文教出版。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説理科編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説図工編。日本文教出版。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編。東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編。開隆館出版販売。
- 長崎・鹿児島・琉球3大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編（2009）複式学級指導法—単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法—。東京教学社。
- 長崎県教育センター（2007）子どもの学びを支える複式授業。https://www.edu-c.news.ed.jp/web_contents/cyosaken/h18/chosa/fukusiki/hand-

book/handbook.pdf (2020.2.20閲覧)

士別市立中士別小学校 (2007) 複式教育の手引き (基礎編) 改訂版. <https://www.hokkyodai.ac.jp/files/00003300/00003382/nakasibeu-1.pdf> (2020.2.20閲覧)

島根県教育委員会 (2015) 複式学級指導の手引き (平成27年度版). <http://eio-shimane.jp/files/original/20180227100533477aa30e04b.pdf> (2020.2.20閲覧)

付記

本稿は、科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (一般)、課題番号18H01003) による研究成果の一部である。